

長畝ふるさと通信



【2023年3月号】

■ ちょっと早いぞ…焦る…

金北山にはまだ多くの積雪が残るものの、桜の開花は例年より一週間程度早いようです。畦塗りを終えた田んぼには水を入れて、トラクターでの耕耘作業が急ピッチで進められています。トラクターの周辺には大勢のカラスが降り立って、田んぼの中にいる餌を食べています。トキはというと、写真には中々撮ることはできませんが、放鳥から既に14年が経過し、野生下の個体数は500羽を超えています(環境省によると野生下個体数537羽、うち野生下生まれ個体は386羽)。また、4月からの種まきに備えて、種もみの浸種や育苗ハウスの修繕などやることは山ほどあるのですが、人手が足りません。2月に家庭の事情で職員が1名退職し、その補充が出来ていないのです。ハローワークに募集しても無のつぶて。聞けばどの業界も人手不足で圧倒的にマンパワーが足りていないとか…。世の中の人々はいったいどこで働いているのやら、誰か働き手はいませんか？



今年、新たに育苗ハウス2棟を増設します。費用はおよそ900万円、決して安くはありませんが、今後の苗販売事業を拡大させるためには必要な施設です。当初4月完成の予定でしたが、マンパワー不足のためまだこんな感じです、焦る。

■ 台湾も佐渡と同じ

3月15日、台湾の東華大学の李教授ご夫妻が佐渡へ視察に来られました(右は通訳のため同行された筑波大吉田教授)。台湾も佐渡と同じく田んぼが開けており、環境保全型農業や付加価値の高い農業展開を進めているようで、トキの認証制度やSDGsの取り組みについて意見交換をさせていただきました。「佐渡の認証米取り組み農家のインセンティブ(英語は難しくわからないので調べてみると「動機」や「報酬」の意味らしい)は何ですか」との問いに「正直、よくわかりません」と答えました。トキの野生放鳥は既に500羽を超え、当初の目的を達成してしまっているし、肝心のおコメの価格は他と比べてもたいして高くないわけで、なぜ、認証米農家を続けているのかは個々によって千差万別なのです。李教授は「リターンが無くても続けられるのは、佐渡の農家は心が豊かで意識が高いからですね」とお褒めのお言葉を頂くと嬉しいやら、気恥ずかしいやら…。日本の現在の厳しいコメ事情を説明すると、世界的な食糧難を踏まえ、お互いに何ができるか考えていきましょう」と励まされました。



● 佐渡は令和4年5月に内閣府からSDGs未来都市に選任されています。

■ 畦の雑草も一斉に

暖かくなって畔の雑草も一気に咲き並びました。3月からマスク着用が「個人の判断」となり4月から自転車のヘルメット着用が「努力義務」となります。しかし圧倒的多数の国民はマスクは外さないし、ヘルメットは被らないでしょう。何でも一斉に行わなければ気が済まないところが日本人らしいと言えるのだろうか…

